

# 小野に吹く風

——潮廻舎文庫蔵、紹巴奥書本源氏物語の異文から——

一文字 昭子

はじめに

表題の潮廻舎文庫蔵本「夢浮橋」巻の翻刻を行った際、この巻全体の異同は、大島本・五十七箇所、日本大学蔵本・五十五箇所、書陵部蔵本・七十六箇所となった。しかしその異同のほとんどは、助詞等の有無（くちあまの・くちあま等）、表記の違い（天狗・てんくう等）、潮廻舎本の誤記と思われるもの（むふつふれて・むねつふれて等）であった。また潮廻舎本十二丁裏には大きな脱落部分があるが、これは明らかに目移りによるものと考えられる。これらの中において、今回とりあげた箇所は、潮廻舎本の独自異文であり、該本の特徴をもっともよく示していると考えられる。

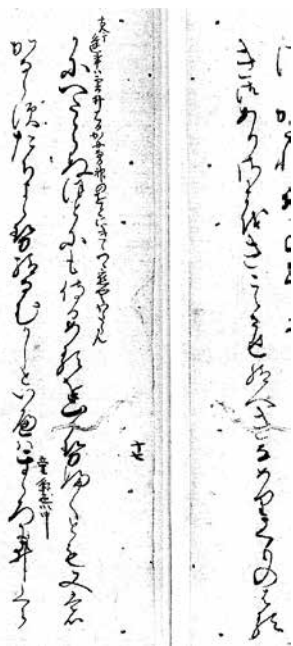
その箇所は「夢浮橋」巻の最後の場面において、尼君が小君に語りかけることばの中の、従来より二つの異文が指摘されてきた箇所である。現在多くの校訂本の底本として使用されている大島本文を以下に示す。

・・・・・・・・・・・・・・・・くものはる

かにへた、らぬほにも侍るめるを山かせふくとも又も

かならずたちよらせ給なむかし

【参考】大島本<sup>2)</sup>



異同が問題となる二行目下方の「山かせふくとも」の部分は、河内本系諸本では「山深くとも」という本文となること、「源氏物語大成」に指摘されている。

さて、表題本（以下、潮廻舎本と記す）の当該箇所本文は以下の通りである。

・・・・・・・・・・・・・・・・くものはるかにへた

たらぬほにもはへめるを山かせふかくくとも

又もかならず立よらせ給なんかし

【参考】 潮廻舎本

潮廻舎本の「山かせふかくふくとも」という独自異文は一見、大島本と河内本の単純な合成本文といった呈を示しているのであるが、このような本文が発生するに至った経緯を辿ることによって、源氏物語の本文が、長い享受史の中で受けてきた扱いが見えてくる。それは源氏物語の本文とはどのような本文であるのか考えさせるものであり、江戸初期の写本、潮廻舎本がもつ意義とはどのようなものかということ考えるとき、様々な示唆を与えるものである。以下、潮廻舎本を主軸に、現在、三条西家本として伝えられる日本大学蔵本および蓬左文庫蔵本とを対比し、三条西家に関わる源氏物語の注釈書をたどりつつ、潮廻舎本の本文の示す意味について考えてみたいと思う。

一 三条西家諸本との比較

潮廻舎本が実際に里村紹巴の手になる本文であるかについては、すでに上野英子氏がその奥書から考察をされている。氏は潮廻舎本奥書には「累年時々遂校合」と記してあるのにもかかわらず、本文には校合の跡がほとんど見当たらないことを不審としながらも、

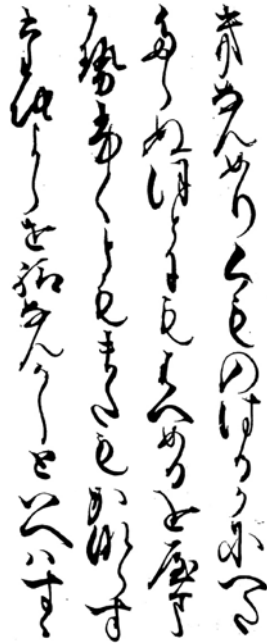
最終的な考察の結果、一応紹巴と何らかの関係を持つ写本として位置付けをされた<sup>(4)</sup>。また中城さと子氏は、書き入れをもととして、潮廻舎本が紹巴所持本を奈良連歌界の連衆によって清書の書写された一本ではないかと推測され、やはり紹巴との関わりを肯定される<sup>(5)</sup>。これらの考察から考えて潮廻舎本は、もともと紹巴が所持していたものの転写本であり、おそらくは、数度の転写を経たものと想定される。現時点では、管見の限り、潮廻舎本の本文「やまかせふかくふくとも」は他には同じ紹巴に関わる紹九本に異本注記としてみられる<sup>(6)</sup>。したがって当該箇所<sup>(7)</sup>の独自異文は、紹巴と何らかの関係があつて生じたもの、との前提に立つて論を進めることとする。

紹巴が源氏物語講釈を受けたのは、三条西公条であつた。そこで現在、三条西家本とされる日本大学蔵本、蓬左文庫蔵本の本文状況を確認すると、日本大学蔵本では尼君の台詞の「くものはるかに」の「く」に合点し、「やまかせふくとも」の右傍に「ふかくイ」という異文の存在を注記している。

【参考】 日本大学蔵三条西家本<sup>(7)</sup>

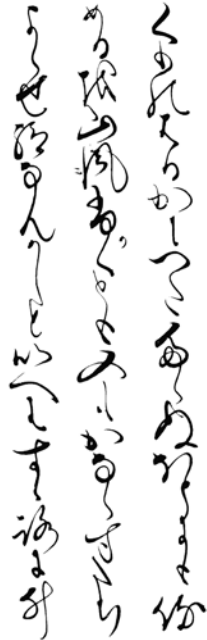
これは「くものはるかに」以下の文が、和歌と関わることを示し、「やまかせ」の箇所にも異文があるということを示していることと解せる。次に蓬左文庫本の本文を確認する。

【参考図】蓬左文庫本<sup>8)</sup>



これに明らかかなように特に記号等の表記はない。なお、池田利夫氏の指摘もあり、三条西家の家本と断定はされないが何らかの関わりはあると考え、参考として書陵部蔵三条西家本の状況を挙げておく。<sup>9)</sup> 図のようにもともと「山風ふくとも」とあるところに「風」にミセケチをし、「ふく」の間の右横に「か」と補入の一字を記している。ここから「山風ふくとも」という本行本文と「山ふかくとも」というミセケチ・補入本文の双方を読み取ることができる。

【参考図】宮内庁書陵部蔵三条西家本<sup>10)</sup>



これらの本文は、いずれも「山風ふくとも」を本行本文としており、「山深くとも」を後から補筆している。傍書にしても、ミセケチにしてもどちらの本文も否定したのではなく、双方の文を示している、というに過ぎない。

## 二

(イ) 古注釈書からの考察

さて『細流抄』では、「くものはるかに」という項目を掲出し、「引哥いまたかんかへさる也心は横川は雲の八重たつ山とはいへれと此あたりはさまでふか、らさる所なれば風はけしくともおりくはとふらひ給へと小君にいひたる也山ふかくともといふ一本あり心はおなしかるへし」と注をつけている。<sup>11)</sup>

紹巴が源氏物語講釈を受けたのは実隆男公条であるが、公条と種通に関わる『孟津抄』では「雲のはるかにへた、らぬ程にも侍めるを山ふかくとも又もかならずたちよらせ給なむかしといへは」と項目を掲げ、「引哥未勘心は横川は雲の八重たつ山なれと、也やまふかくといふ本もありかやうの山居をとひ給へと小君に尼公の詞也山

風ふくとも」と記している。項目文で「やまふかくとも」と書かれていることが、やや不審であるが、注釈本文には「やまふかくといふ本もあり」と書かれているので、源氏物語の主本文としては「山風ふくとも」を想定していると考ええる。

これら両注釈書は共に項目として「くものはるか」から掲出し、注釈本文ではそこにまず引歌がないと言及する。次に『細流抄』では横川ならば「雲の八重たつ山」つまり山深い場所であるが、小野はそうではないとし、『孟津抄』は、横川は山深い場所であるが、「やまふかく」という異文があるので、小野も「山深い」といえないことではないという解釈となっている。『細流抄』とは文意が微妙に異なってきた。

さて三条西実隆が古今伝授をうけたのは宗祇であった。『弄花抄』を見ると、「山風吹とも イ本山ふかくとも」と異文が存在することのみ記されている。注記は「くものはるかに」部分に引歌云々から始まるのではなく、単純に「山風ふくとも」の箇所の異文を示すだけである。したがって宗祇は特に和歌に言及しなかったが、実隆は異文の存在よりも関係する和歌を重視したと考えられる。続く公条も種通も、異文そのものよりも尼君詞にある「くものはるか」という部分に歌が関わることを問題とし、その歌自体は「未勘」とした。異文については和歌に関する補助的指摘にすぎない。

実隆・公条等は、「くものはるかに」という尼君の詞と、横川が「くもの八重たつ山」であることから、この箇所に関わる和歌の存在を疑っている。すでに横川が「くもの八重たつ山」であることの指摘は、『源氏釈』にある。『源氏釈』では「松風」巻において「白雲の八重たつ山の峰にたにすめは住ぬる世にこそ有けれ」という和

歌を挙げ、「雲の八重たつ山」という歌語を示す。また『河海抄』でも、同じく「松風」巻において「都より雲の八重たつおく山の横河の水はすみよかるらむ」という『新古今和歌集』の歌を挙げている。この歌は、詞書によれば「少将高光、横河にのほりて、かしらおろし侍りにけるを、きかせ給ひてつかはしける天曆御歌」とあり、返しに如覚（藤原高光）の「百城の内のみつねに恋しくて雲の八重たつ山はすみうし」とある。残念ながら現存の『高光集』にこの歌は見られない。これらはいずれも「松風」巻の指摘であって、「夢浮橋」巻では言及されない。

なお『花鳥余情』では「夢浮橋」巻当該箇所では「雲のはるかに云々」をあげ、『古今和歌集』の「あふことは雲井はるかになる神の音にき、つ、こひやわたらん」をあげ、「山風ふくとも」についての記述はない。またこの和歌は、先にあげた大島本にも傍書として記されている。

いずれにせよ「源氏釈」「河海抄」の指摘があるということから、「横川」（比叡）山「雲の八重たつ山」という連想はすでに周知のことであったと考えられる。『細流抄』をはじめとする三条西家の面々は「源氏釈」あるいは「河海抄」があげる『新古今和歌集』等の歌を念頭に置いて注釈をおこなったものの、実隆、公条、種通はいずれも「夢浮橋」巻当該箇所の引歌としてはとらなかつたということになる。

つまり紹巴にいたる前の段階では、この部分はあまり重要視されず、単に異文の存在が確認されていただけであって、それよりもむしろ尼君の詞の「くものはるかに」という部分に想定される引歌の存在が問題とされていたということである。

(口)『紹巴抄』の記述

さて公条から『源氏物語』講釈を受けた紹巴はこの部分をどのよ  
うに考えていたであろうか。永禄六年(一五六三)三月に行われた  
三条西公条の『源氏物語』講釈を聴聞してまとめたのが『紹巴抄』  
である。先の植通は弘治元年(一五五五)閏十月二十七日から『桐壺』  
巻の講義を受け始め、永禄元年(一五五八)六月には「橋姫」巻に  
至ったという。『孟津抄』が成ったのは天正三年(一五七五)七月七  
日である。したがって『紹巴抄』は『孟津抄』と時期的にはほぼ重なっ  
ている。永禄の奥書を持つ『紹巴抄』では項目として、同じく「雲  
のはるかに」を掲げるが、注釈本文は、「横川は雲のたつ山なれ共  
このあたりはさもなきま、風吹とも又とひ給へ」とも、山風ふかくと  
も、イ本 引哥不及 山風吹は手習のあはてかへす心はけしきと云  
心と也 いか、とある。<sup>15</sup>「風吹とも」は、字形から「山風」の転  
移と考えられる。今一つの文禄四年(一五九五)書写の奥書を持つ  
写本では「横川は雲のたつ山なれとも此あたりはさもなきま、山か  
せふくとも又とひ給へ」とも山風ふかくイ本引哥不及山風ふくは手習  
いのあはてかへす心はけしきと云心と也いか、となつてゐる。<sup>16</sup>「イ  
本」の前の「山風ふかく」の「風」にはミセケチが記されている。  
問題は「細流抄」「孟津抄」ともにまず引歌未勘とし、横川は雲  
の八重たつ山としたのに対して、『紹巴抄』の注釈本文はいきなり  
「横川は雲のたつ山」とはじまり、しかも「八重」が落ちている。  
この箇所引歌を指摘する文言はなく、尼君の詞を解釈しただけで  
ある。さらに「山風ふかくとも イ本 引歌不及」とあり、異文の  
掲出の次に引歌云々という注釈がつく。「山風ふく」でもなく「山  
深く」でもなく、ここで初めて「山風ふかく」という異文が現れる

のである。

つまり『紹巴抄』では、本来「くものはるかに」という項目に考  
えられていた引歌の存在が、「山風ふく」という異文の箇所へ移っ  
てしまつてゐるということである。これを紹巴が、ただちに引歌の  
箇所を誤解したと考えるより、むしろ講義内容を聞き取つて書き取  
る際の、書き方に問題があつたと考えるほうがよいのではないだろ  
うか。紹巴の事蹟を勘案すれば、その方が妥当と思われる。ただし、  
注目する箇所は、「八重」が落ちているように、「くものはるかに」  
という部分からは、遠ざかつてゐるといえる。

さて潮廻舎本は奥書によれば、弘治三年(一五五七)の書写であ  
るから、公条の源氏物語講義より早く、また『紹巴抄』の成立より  
八年程早く書かれてゐることになる。『紹巴抄』の記述との  
関連はどのように考えるべきであろうか。他の紹巴本と呼ばれる源  
氏物語の本文、たとえば今治市河野美術館蔵の紹巴本を確認すると  
当該部分は「やまかせふくとも又のかならずたちよらせ給なんか  
し」とあり、特に傍注等はない。今治市河野美術館本は、紹巴晩年  
の書写にかかわる写本であり、『紹巴抄』より後のものである。こ  
の二つからのみの推定にはいささか問題もあるが、これらの材料か  
ら考え得るもつとも妥当な推論は、潮廻舎本自体の原本からの転写  
の過程で異文の合成がおこつたことである。先に述べた紹九  
本の注記に「やまかせふかくふくとも」という異文が存在すること  
からも、奥書にある「南都旧友」「彼老人」をとりまく紹巴信奉者  
が写したときには、すでに手元にあつた『紹巴抄』の本文から、そ  
の意図するところを「やまかせふかくふくとも」と読み取つて、当  
初は異本注記という形で併記されていたものが、ある段階で源氏物

語本文にそのまま取り込まれたのであろう。この場合、潮廻舎本のもともとの奥書はあらためなかつたことになる。

先に掲げた、源氏物語本文の日本大学蔵本の傍書としての異文表記、宮内庁書陵部本の本文のミセケチという方法は、注釈書を勘案すれば、「やまかせふくとも」という本文を「やまふかくとも」という本文に訂正しているのではなく、単に二つの異文が存在していることを示しているにすぎない。『紹巴抄』は「山風ふかく」に「風」にミセケチをして、「山ふかく」という本文を示そうとしたのかもされないが、読み手の中にこれを「山風ふかく」という本文を選択したものがいたのであろう。そしてそれを物語本文の書写に反映し、潮廻舎本の本文が成立した。この推測が成り立つならば、潮廻舎本の本文は、源氏物語の本文を歌という視点から取り扱ったものという特徴が指摘できる。これは本文校訂という点からは種々の問題を含むことになるが、当時の人々の源氏物語に対する姿勢を知るといふ点からは、非常に貴重なデータといえる。

### (八)「山風深く吹く」という文について

しかしながら風が《深く》吹くという文は、一般的な言い回しから考えると違和感がある。源氏物語本文においても、風が《深く》吹くという表現はない。ただ、深山に吹きささぶ風、深山から吹いてくる風としての「深山風」という語は、「夕霧」巻において使われている。雲居雁が「一夜の深山風に、あやまりたまへるなやましさななりと、をかしきやうにかこちきこえたまへかし」とあり、これは夕霧が小野を訪ねたことに対する雲居雁の皮肉であり、小野とかわっている語である。また風が山奥から吹き下ろしてくる「深

山風」という語も「若紫」「紅葉賀」に出てくる。特に「若紫」では「吹き迷ふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな」と、源氏が北山の僧都に詠みかけた和歌に使われている。以上の例から、「山」「風」「深」「吹」という語は、共に使用される頻度の高いものであったといふことはいえるかと思う。

和歌における用例を見渡せば、『為信集』に「風ふかみなごりうかりしおきつなみなみうちつけにそでのぬるらん」という例が見られる。「風ふかみ」は『新編増補国歌大観』においてはこの一首のみであるものの、『為信集』は源氏物語との関係が指摘されており、先後関係はともかくとして写本に影響を与える可能性は大きい。

また紹巴の活躍した時代の直前の例として「太山かぜふかく吹きしく冬のはに木の実も落ちて谷にいくこゑ」(正徹千首五二二)がある。この二例から紹巴の時代には、歌語表現として、あまり抵抗なく受け止められたとも考えられる。

### 三 最初の二つの異文について

これまでの考察から、当初は「やまかせふくとも」と、「やまふかくとも」という二つの異文が存在したことが、当初はこれらの異文の直前のことばに対してなされてきた和歌の指摘が、紹巴の時代にいたって、注釈の書き方から異文の方に、引歌が存在すかのような印象を与えることとなり、「やまかせふかくとも」という新たな異文が派生したであろうことを述べてきた。

ここで源氏物語本文自体に立ち返って、この尼君たちが住んでいる「小野」という場所を再確認し、その面から当初の二つの異文についての考えを述べておきたい。物語における小野とは「手習」巻に

おいては、門田があり、庭には前栽も趣深くつくった貴族の別荘といった風情ある場所として描かれ、「夢浮橋」巻の描写ではそれよりもやや奥地へ移行している感はあるものの「そのわたりにはた、ちかき比ほひまで人おほく住侍るを」というように、今でこそ、寂れてはいるが、常に人がいなくなったわけではない、そういう場所とされている。巻に応じて多少の変化がみられるものの、決して山奥とはいえない場所である。横川から比較すれば叡山の入口で、老尼たちだけで住むことができる地、それが小野、「野」である。

和歌的な表現においては、人里離れた山の奥をあらわす「奥山」という語が、京都の東山や北山に対して使用されていることが指摘されているものの<sup>109</sup>、ここでは、和歌の部分でなく、尼君の詞の中にあらわれる語である。『河海抄』が「松風」巻において「都より雲の八重たつおく山の横河の水はすみよかるらむ」という『新古今和歌集』の歌を挙げているが、この場合、「奥山」は横川のことである。小野に吹いてくる風は、奥山の横川から吹いてくる風なのである。それでも「山ふかく」という異文を安易に切り捨てることとはしないのは、当時主流の源氏物語本文であったことも大きな要因ではあるが、この語に何かもつと別の捨て難い面を見いだしていたとも考えられる。

源氏物語本文内において、「山ふかい」とされる場所は二例あげられる。いずれも「浮舟」巻で匂宮が宇治に住む浮舟に逢いに行く途上である。現在の京都市東山区本町にあったという藤原忠平建立の法性寺を過ぎたあたりから、宇治までのあたりまでを山深い場所とする。潮廻舎本を例文として掲げれば、次のような記述である。

(例1) あやしきさまのやつれすかたして御馬にておはする心  
ちものおそろしうや、ましけれともの、ゆかしきかたはす、み  
たる御心なればやまふかうなるまゝ、にいっつかいかならんみあ  
はすることもなくて

(例2) 京にはともまつはかり消のこりたる雪山ふかくいる  
まゝにややふりうつみたり

例2はさらに限定し木幡山あたりを指すとされる。木幡は藤原氏の墓所として有名であり、栄花物語「うたがひ」には道長が初めて父に連れられていったとき、その荒れ果てた様を嘆いて、後に淨妙寺を建立して供養したという話が載せられている。当時は人里離れた場所として認識されていた。

注目すべきは源氏物語本文内で、山深いとされたこの木幡山付近がまさに浮舟に逢いに行くために匂宮が通らねばならなかった場所であるということである。浮舟はその出生から山奥と深い関わりのある女君であった。「東屋」巻冒頭において、「筑波山を分け見まほしき御心はありながら」と描かれ、引歌「筑波山端山繁山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり」が挙げられるように、浮舟は都から遠く離れた筑波の山奥から登場した女君である。このことが、物語最後に浮舟がたどりついた場所を「山ふかい」とするある種錯覚を誘引する一因となり、「山ふかくとも」という尼君の異文が許容される所以と考えられる。

本来「夢浮橋」巻の舞台、小野は紫式部の母方に縁の深い土地であった。小野は式部母方の曾祖父である文範の山荘があったことで知られている。実際「手習」巻ではそこが貴族趣味の別荘地として

描かれており、「夢浮橋」巻でこそ、少し奥に移動したかのような描き方となるが、そもそも尼君たちは山奥に隠遁するような人物としては描かれていない。そう考えれば「山風ふく」という本文は散文的な流れを汲んでいるといえるかと思う。そして物語内の浮舟の出自や、和歌との関わりを考えれば、「山ふかく」という本文は、極めて和歌的意識の強い文である。とすれば、この二つの異文は、源氏物語を読む目的や、源氏物語の読み手の素養の違いによって生じたと考えられる。この二つの異文がどちらも否定されることなく、伝わったことが、潮廻舎本の異文が派生する最初の要因であった。それは、源氏物語の本文が一つでなくともよいという前例として受け止められたということになるかと思う。

#### 四 結論

以上のことをまとめれば、潮廻舎本の持つ「やまかせふかくふくとも」という独自異文は「山風吹くとも」と「山深くとも」という古い二つの本文から派生した。三条西家に関わる源氏物語本文には「やまかせふく」を本行本文とし、「やまふかく」を異文とする記述が確認される。この二つの本文は、源氏物語成立のはい段階で発生し、源氏物語の享受の歴史の中で、はやくから共に、平行して受け入れられてきた。「山風吹く」は散文的、「山ふかく」は、浮舟の出自と浮舟にかかわる和歌および和歌的表現と深く関わっている。それ故にどちらも切り捨てられることなく、この二つの異文は、平行して伝わった。

中世に至って、引歌の存在が、少し前の箇所である「くものはるかに」の部分について検討され、『新古今和歌集』等の数首の和歌

が提示されているものの、三条西実隆、公条、種通はいずれの和歌もこの場所の引歌としてはとりあげなかった。それについての考察は別稿に譲る。「くものはるかに」に明確な引歌を提示しなかった公条の講義を受けた紹巴は、和歌の指摘を「山風ふく」という箇所まで含めて考えたと推定される。紹巴その人とは断定できないが、その注釈の本文の読み取り方によって、「やまかせふかくふくとも」という新たな異文が発生した。風が「深く」と吹くという特異な表現は、和歌表現の二つの例証から推定して、紹巴周辺の人々に、さしたる違和感なく、歌語として認知されたと推定する。それは『紹巴抄』の本文の書き方からも、あまり抵抗なく受け入れられたと思われる。なお、紹巴周辺の人々とは、紹巴の弟子、あるいは孫弟子様の人を想定している。その根拠は後年、紹巴は関与した源氏物語写本の奥書に固有名「蓮華寺」「大東和忠」など明記しているが、潮廻舎本の奥書の言葉はそれに比して「南都旧友」や「彼老人」という曖昧な言葉を使用し、かつそれらの人からの「懇望」によって書写したと書かれているからである。

この結論からいえることは、潮廻舎本は、紹巴周辺の人々が源氏物語を歌との関わりを強く意識して必要とされた結果誕生した本文ということになるかと思う。そもそも藤原俊成が、「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事也」（六百番歌合・冬上十三番「枯野」判詞）と述べているように、『源氏物語』を読む目的の多くは、和歌との関わりからであった。紹巴および周辺の人々も連歌のために『源氏物語』を必要としたのであって、厳密な本文考証および校訂に対する意識は薄かったと思われる。源氏物語とは、その享受史を含めて現在まで読み続けられている物語である。潮廻舎本の本文が示す、書写者



の必要性において時に、大胆な改変が行なわれたのであろうという事実は、源氏物語の本文が、河内守光行・親行や藤原定家が校訂整理したのちも、それらの本文が神聖視され、固定化したわけではなく、目的により、本文が流動的であったことを示している。それは『源氏物語』が現在にいたるまで、何故読まれ続けてきたのかという問題にもつながっていく。今回はごく一文の考察であったが、この結果が、潮廼舎本全体に敷衍されるか、今後の課題としたい。

注(1) 潮廼舎文庫「年報」08号、拙稿「潮廼舎文庫蔵『紹巴奥書本源氏物語』翻刻(夢浮橋)」（二〇一〇年三月）

(2) 影印本『大島本源氏物語』(古代学協会・古代学研究所編・角田文衛、室伏信助監修・角川書店、一九九六年)

(3) 大系本の底本となった宮内庁書陵部蔵本については、池田利夫氏の論考「三条西家青表紙証本の問題点」(『源氏物語の文献学的研究序説』所収、昭和六十三年・笠間書院)により、今回は参考として示すにとどめた。

(4) 潮廼舎文庫「年報」08号、上野英子「潮廼舎文庫蔵『紹巴奥書本源氏物語』と『紹巴抄』」(二〇一〇年三月)

(5) 中城さと子「紹巴本『源氏物語』について―夢浮橋の調査を中心にして―」(潮廼舎文庫研究所「年報」09号・二〇一一年三月)

(6) 前掲注(4)参照

(7) 影印本・日本大学蔵『源氏物語』第十一卷「三条西家証本十一」(平成八年刊・八木書店)

(8) 蓬左文庫本よりの紙焼き画像による。

(9) 池田利夫「三条西家青表紙証本の問題点」(『源氏物語の文献学的研究序説』笠間書院、昭和六十三年)

(10) 宮内庁書陵部蔵、青表紙本源氏物語「夢の浮橋」(新典社・平成五年

再版13版)による。宮内庁書陵部にて、原本の状態を確認。ミセケチ。書き入れの墨色は本文より濃い。

(11) 源氏物語古注集成第7巻、伊井春樹編『内閣文庫本細流抄』(桜楓社、昭和五十五年初版・昭和六十年版)による。なお九曜文庫蔵源氏物語享受資料影印叢書の『細流抄』(中野幸一編、二〇〇八年刊・勉誠出版)も本文はほぼ同じ。

(12) 源氏物語古注集成第6巻、野村精一編『孟津抄』下巻(桜楓社・昭和五十七年初版・昭和六十二年版)による。

(13) 源氏物語古注集成第8巻、伊井春樹編『弄花抄 付源氏物語聞書』(桜楓社・昭和五十八年初版・六十年再版)

(14) 井上宗雄氏による(前掲注(5)所載「九条種通の生涯」)

(15) 翻刻平安文学資料稿(第2期10)「源氏物語紹巴抄―水禄奥書―」(稲賀敬一・広島平安文学研究会、一九八六・一六)

(16) 奈良女子大学坂本龍門文庫善本電子画像集『源氏物語紹巴抄』による。なお国会図書館蔵『源氏物語抄』(二四一―二〇―二二四)も「山風ふかくい」とある。

(17) 今井源衛「為信集と源氏物語」(九州大学国語国文学会「語文研究」二十号・昭和四十年六月)、岡一男「源氏物語の基礎的研究」(東京堂出版・一九六六年)、笹川博司「為信集と源氏物語」(風間書房・二〇一〇年)

(18) 拙稿「小野の山里再考―尼君庵の変奏―」(平成十七年十一月・至文堂『国文学解釈と鑑賞』別冊所収)

(19) 三省堂『例解古語辞典』(第三版)「奥山」項

(20) 「蓮華寺」は東海大学蔵本(天正八年(一五八〇)書写)奥書、「大東和忠」は蓬左文庫蔵本(天正八年(一五八〇)書写)の奥書にみられる。いずれも上野英子氏の調査結果による。大東和忠は奈良春日大社社家の出で、紹巴の弟子の紹九のことである。